

非動的事象描写における副詞“都”の生起

橋本 永貢子*

1. はじめに

本稿は、形容詞述語文あるいは“是”字文、すなわち状態や属性、類別などを表す非動的事象描写における“都”の出現状況について考察し、総括の意味を持つ“都”が叙述タイプや文の概念領域に深く関与することを明らかにする。

まず、次の(1)(2)を比較されたい。

(1) 他说，他每次登完山后，很高兴，很有力量，以后还想登。

(新华社新闻报道：CCL)

[いつも登山の後には、嬉しく、力が十分で、また登りたいと思うと、彼は話した。]

(2) 总理每次见到他都很高兴，两人说话都很随便，而且一直都在开怀大笑，没有一般外交场合的那些礼仪。(作家文摘：CCL)

[総理はいつも彼に会うと嬉しく、二人は飾ることなく話をし、大いに笑い、一般的な外交の場での儀礼的なやり取りはなかった。]

(1)(2)は、いずれも下線部「いつも～嬉しい」という意味の文が含まれるが、一方には“都”が無く、一方にはある。ただし、(1)に“都”を挿入することもできるし、(2)から“都”を削除することもでき、“都”を挿入すれば“每次”が強調されるし、削除すれば強調されず、他の部分と同様な語気で叙述される。

* はしもと・えくこ 岐阜大学地域科学部教授

- (3) 李昕の性格外向、开朗，她觉得和男队员相处起来反而更为融洽。在训练中队员服从教练，训练后大家是朋友，队里气氛轻松、自由。

(1998年人民日报：CCL)

[李昕の性格は外交的で明るく、男性隊員という方が打ち解けられる気がした。訓練中隊員は教官に従うが、訓練後はみんな友達で、隊の雰囲気は気楽で自由だった。]

- (4) 胡说，你要么不应，既然答应了人家就要做到。这是个信誉问题。大家都是朋友，我怎么跟人家交代？你办事不力嘛！

(六六・蜗居：CCL)

[バカなことを言うな、承諾していないわけでなし、承諾した以上は最後までやらないと。これは信用問題だ。みんな友達なんだから、そんなこと言えやしないよ。ちゃんとやらないと。]

(3)(4)には、いずれも下線部「みんな友達である」という意味の文が含まれるが、一方には“都”が無く、一方にはある。これらにおいても“都”の有無は、語気の相違に現れる。(4)は、「みんながみんな」というように範囲を指定し、確言的な、きっぱりとした口調であるが、“都”を削除すると、その口調が弱まる。(3)の下線部に“都”を挿入すれば、下線部が強調され、相対的に“队里气氛轻松、自由”の部分が従属的に解釈される。

(1)(3)の例文からも明らかのように、総括の意味を持つ“都”は、“每次”“大家”など[+複数]や[+全量]という意味特徴を有する語彙があれば常に共起するというわけではない。[+複数][+全量]を顯示すべきコンテキストにおいて付加されるものである。すなわち、コンテキストにおける、意味論的なあるいは語用論的な要因がその生起に関与するといった性格を持つ。そこで問題となるのは、具体的には一体どのような意味論的なあるいは語用論的要因が“都”の生起に関わるのか、とい

うことである。

こうした問題は、教学上で取り上げられやすく、解燕勤 2005 や胡蓉洁 2012、李丽君 2015 等が、特に初級の学習者において適切に使用できないことを指摘している。しかし、いずれも具体的なコンテクストを踏まえての検証はなされておらず、学習者の疑問に対し明確な答えを示すに至っていない。袁毓林 2005a, 2005b は形式言語学の立場から“都”を取り上げ、その有無による意味的相違に一部言及している。また、“都”によって範囲を指定される NP は、主語以外の成分であっても潜在的な主題であると指摘している点は、本稿の考察にあたっても有益な示唆を与えている。しかし、袁毓林 2005a, 2005b の主たる関心は“都”の意味機能であり、必要条件があるにも関わらず“都”が生起しない理由については考察されていない。こうした中でより本稿の関心に近い議論として、「一般的描写性陳述文」の場合“都”を付加する必要がないと指摘した蘆濤 2005 がある。蘆濤 2005 では、残念ながら「一般的描写性陳述文」について詳細に述べられていないが、その意味するところは、橋本 2017 が、具体的なコンテクストを踏まえて詳細に考察している。橋本 2017 は、動詞述語文の場合について考察し、「特定の時空間に実現・存在する個別的現象を描写する現象叙述文」では“都”が生起せず、“都”が生起するならば、それは「話し手の認識や判断を示す主題叙述文」だと主張している。また、同一の現象を描写するにあたって、現象叙述と主題叙述のいずれを選択するのかが、中国語と日本語では相違する場合のあることも指摘している。そして、選好する文スタイルが言語によって必ずしも一致しないため、学習者の中国語が時に“让人一看就知道不是中国人说的”（見ればすぐに中国人の発話ではないとわかる）¹⁾ という事態を招くと述べている。

例文に戻ろう。「嬉しい」という感情・状態は、ある時点に出現するよ

1) 解燕勤 2005 : 69 参照。

うなものであるが、一般にはデキゴトというより、一定の期間継続するようなサマであり、関与者がそうであると判断するようなものである。また、誰かと誰かが「友達である」という類別・属性は、一般的に考えれば特定の時空間に限定されるものではない。したがって、橋本 2017 に従えば、(1)～(4)の下線部はいずれも主題叙述文となり、“都”が付加されるべきということになる。ところが(1)(3)では、“毎次”“大家”という語があるにもかかわらず、“都”が付加されていない。このことは、形容詞述語文あるいは“是”字文といった、非動的事象の描写においても、動詞述語文におけるような現象叙述となる場合があるということだろうか。それとも、形容詞述語文および“是”字文では、動詞述語文とは異なる要因が“都”の生起を決定しているのだろうか。

以下では、こうした問題意識に基づき、形容詞述語文と“是”字文において、“都”が生起する要因、生起しない要因を探っていく。形容詞述語文については感情および感覚を描写する場合とそれ以外とに分けて考える。そして、いずれの場合も事実を事実として叙述しようとするのか、あるいは話し手の視点に基づく認識や判断として叙述するのかが“都”の生起に関わることを、“都”自身の語彙的使用条件と合わせて指摘する。

2. 感情および感覚を描写する形容詞述語文と“都”

まず、橋本 2017 が主張するような文の叙述タイプと“都”の生起が、形容詞述語文においても妥当であるか否かについて検証してみたい。

感情を表す場合から見ていこう。

- (5) 3月初，我们听说北京来电话，需要新鲜的蒜苗，大家很高兴，立即组织了9吨货源，装上了卡车，3月5日送到了北京大学供应处。

(人民日报：CCL)

[3月はじめ、新鮮なニンニクの芽が欲しいと北京から電話があったと聞き、みんな喜び、すぐに9トン分の調達先を決め、トラックに積んで、3月5日に北京大学物資係に送った。]

- (6) 铃声一响，踏进来的王国维使大家很吃惊！怎么这么一个人就是王国维？一看就是刚才我描写的西瓜皮帽子、马褂、长衫，等到他转身写字的时候，后面一根长长的辫子……大家很失望！这就是我们的老师？这就是我们仰慕的伟大的国学大师？（百家讲坛：CCL）

[ベルが鳴って、入ってきた王国維を見て、みんなは驚いた。何でこんな人が王国維なんだ。さっき私が言ったとおりのスイカの皮の帽子に、馬褂を着て、振り返って字を書く時には、長いおさげのその人じゃないか。みんながっかりした。この人が私たちの先生なのか。敬慕していた国学の巨匠なのか。]

- (7) 我马上说：“你们对脚伤挺有兴趣，我提点旁证行吗？我还有这只脚当时穿的袜子，上边有那破瓶子扎破的洞。”他们很惊讶，说：“十多年，当时的袜子你还留着？”我说，这袜子原先摺在家，后来家里送来穿。（冯骥才·一百个人的十年：CCL）

[私はすぐにこう言った。「あなたたちは足の傷にとっても関心があるようですね。証拠を出しましょうか。私はその時この足に履いていた靴下を持っていますよ。上の方に割れた瓶で空いた穴がありますよ。みんなは驚き「十数年もたっているのに、あの時の靴下をまだ持っているんですか。」と言った。「この靴下は、もとは実家に放ってあったんですが、その後履くようにと送ってきたんですよ。』]

(5)は、北京からニンニクの芽の注文が入ったことを聞いて、みんな喜び、すぐに調達先を決め、北京に送り届けたという、一連の事象について述べている。ここで“大家很高兴”「嬉しい」という感情は、実際のところ、おそらくその後も持続した感情であったと想像される。しかしこ

の場面においては、その感情が特定の時空間に発生したデキゴトとして描写されている。(6)では、敬慕する王国維の実際の風貌を目にして、みんなががっかりしたという場面である。“大家很失望！”に続いて“这就是我们的老师？这就是我们仰慕的伟大的国学大师？”とあるが、“这”という指示詞を用いることで、視点をその現場に置き、みんなの失望ぶりをありありと描写している。(7)でも同様に、“我”が足を怪我した十何年も前に履いていた靴下を今も持っていると話したことに、彼らは驚いたと、特定の時空間に発生したデキゴトを順に描写している。

これらに対し、“都”が現れている文はどうであろうか。

(8) 今年京城头一次禁止燃放烟花爆竹，告别了“鞭炮连天，硝烟弥漫”的旧习俗，节日过得又安全又祥和，大家都很高兴。（人民日报：CCL）

[今年首都では初めて花火や爆竹が禁止され、「爆竹が鳴りやまず、砲煙が立ち込める」という旧習に別れを告げ、正月を安全で静かに過ごすことができ、みんな喜んだ。]

(9) 下午家里人来了一趟。姐姐说，我表现不好，大家都很失望。还说了莉莉的一些事情，埋怨了我好多。（张平・十面埋伏：CCL）

[午後には家族がやってきた。姉は、私の態度が良くなく、みんなががっかりしたと言った。その上莉莉のことで、随分と私への恨み言を言った。]

(10) “本来一下飞机就听说姑姑住院了，我们都很惊讶，也有点生气，因为这么大的事情我们事先完全不知道。……(後略)”

(非诚勿扰：CCL)

[飛行機を降りると、すぐに叔母が入院したと知らされ、私たちは驚き、また少し腹も立ちました。というのは、そんな大事をあらかじめ知らされてなかったんですから。]

(8)は、花火爆竹が禁止され、安全で穏やかに旧正月を迎えることができ、

みんな喜んだというのであるが、花火爆竹の無い祝日を迎えたことに対する庶民の反応を論評するというものである。(9)は、私の態度が良くなかったため、みんなががっかりしたと、姉が非難したという場面である。ただし、みんなががっかりしたのは、この場面に先立つ午前中のことである。(10)でも、私たちが驚いたのは、今話をしているこの場面ではない。それ以前に発生した、飛行機を降り、叔母が入院をしたと知らされた時のことである。こんな大事なことを知らせてくれないことに、驚いたのであると、比較的冷静に感情を分析している。

これら、(5)～(10)の“都”のある文、無い文は、それぞれに“都”を削除あるいは付加しても、非文法的というわけではない。(8)～(10)の下線部から、“都”を削除しても成立するが、それぞれの感情を表す気分が十分に伝わらず、やはり残した方がよい。一方(5)～(7)においては、“大家”の後ろに“都”を挿入しても文法的には成立するが、デキゴトを順に描写する中で、“都”を付加した下線部だけが強調されてしまう。感情表現は、“感到 高兴/失望/惊讶”と表現できるように、ある時点でその感情が起こるというイベント的要素を持つものである。したがって、“都”が無いのは、動詞述語文の場合と同様、当該場面で感情の変化が起こったことを一つの現象として叙述していると解釈できる。仮に“都”を付加するならば、それはデキゴトというより、「みんな」あるいは「私たち」の感情そのものに着目することになる。

こうした現象か認識かという相違は、(10)の文中内の二つの因果関係に、はからずも窺い知ることができる。(10)において、驚いた直接の原因は、叔母が入院したと聞かされたことであるが、文の後半ではあらかじめ知らされていなかったからという理由と関連付けられている。Sweetser 1990は、言葉の意味を考えるうえで、現実世界の内容領域、認識領域、言語行為領域の三つの領域について述べ、因果性については、次の例を挙げて説明している。

(11) a. John came back because he loved her.

[ジョンは彼女を愛していたので帰ってきた。]

b. John loved her, because he came back.

[ジョンは彼女を愛していたのだ、というのは、彼は帰ってきたからだ。]

c. What are you doing tonight, because there's a good movie on.

[今夜何か予定ある？というのは、いい映画をやっているから。]

(11a)は現実世界の因果性であるが、(11b)はジョンが帰ってきた事実から考えて、ジョンは彼女を愛していたと類推し結論付ける認識領域での因果性であるという。また(11c)のbecause節は、予定を聞くのは映画に行こうと提案したためだという、言語行為の原因を説明しており、言語行為領域でなければ成立しない因果性であると述べている。

(10)の因果性を、こうした三つの領域に当てはめて考えれば、「叔母が入院したと聞いた」→「驚いた」は、現実世界の内容領域で理解される。一方、「大事なことを知らされていない」→「驚いた」は、認識領域で理解される。なぜなら後者は、現実起こった「知らせる」という行為を、「それまで知らされていなかった」と認識したことにより「驚いた」からである。そして、更には、「知らされていなかった」ことに対する非難という行動あるいは態度として「驚いた」「腹が立った」を理解することもできる。認識領域および言語行為領域で解釈するなら、「驚いた」はもはや単純なデキゴトではなく、より複雑な解釈を促す一つのサマと言える。

次に、感覚の場合を見てみよう。

(12) 梁思礼摔得昏了过去，醒来时，头顶湿湿的，是血，胸背很疼，喘不过气。 (1994年報刊精選：CCL)

[梁思礼は、転んで気を失い、気が付いた時は頭頂が濡れていて、それは血であり、胸も背中も痛く、息も絶え絶えであった。]

- (13) 江有礼心中暗暗说道：“操你妈的，正事不办，光耍嘴皮子，一群新时代的衙内。”但脸上却做出极其谦恭的表情，连连朝着倪总点头，仿佛小学生在听班主任的训话。见江有礼如此听命的样子，倪总感觉清气上升浊气下降，浑身非常舒服。

（肖克凡・最后一座工厂：BCC）

[江有礼は、心の中でこう言っていた。「くそつたれが、まともなことはやらず、へらず口をたたくばかりの新時代の坊ちゃんたちよ。」しかし、極めて礼儀正しく、小学生が担任の訓話を聞くように、倪社長の言うことに何度も何度もうなずいていた。江有礼のその従順な様子に、倪社長は、清らかな気が淀んだ気と入れ替わったようで、全身とても気持ち良かった。]

(12) は、意識を取り戻した際に気が付いた体の状態を順に述べているが、頭部の出血、呼吸の困難さと並列されていることで、上半身の疼痛も、現象の一つとして描かれている。(13) では、江有礼の内心とは裏腹な恭順な様子を見て、倪社長は非常に気持ちが悪くなったというのである。江有礼の従順な様子が、いわば刺激体となり、倪社長の快感を引き起こしたわけである。“浑身非常舒服”は倪社長の状態ではあるが、一方で刺激により引き起こされたイベントでもある。

- (14) 忽然门响了，我走出来一看，进来的人是黄红梅：“好点儿了吗？昨天你喝多了，保安冲你动起了拳脚，要是我不赶到，你可能要被人打死。”我这才发觉自己浑身上下都很疼，我想也许我已经鼻青脸肿了。

（邱华栋・哭泣游戏）

[突然ドアの音がし、出ていくと、黄紅梅が入ってきた。「良くなった？あなた昨日飲みすぎていて、ガードマンが殴ったり蹴ったりしたのよ。もし私が行かなかつたら、殺されてたかもしれないわよ。」私はようやく全身上も下も痛いのにな気が付いた、鼻も顔も腫れあがっているかもしれ

ない。]

(15) 睡了两个钟头，醒了。他觉得浑身都很舒服，懒懒的。他只要一翻身，合上眼，会立刻就睡着的。 (汪曾祺・看水：CCL)

[二時間眠って、目が覚めた。全身が気持ちよく、けだるい感じだった。寝返りを打ち、目を合わせさえすれば、すぐに眠れそうだった。]

(14)は、訪ねてきた黄紅梅に、上半身も下半身も痛い、顔もあざができて腫れあがっているのではないだろうか、私が話している。(12)の場面と類似しているが、まだ酔いが醒め切っていないのか、体の痛みを“我这才发觉”と、自身の認識として提示している。(15)では、目が覚めると体全体が気持ちよく、けだるい感じがしたと、徹夜後の明け方にひと眠りした後の状況を描写している。(13)の場面と異なり、「気持ちが良い」状態を引き起こした刺激体は明示されておらず、その時点でイベント性が弱く、状態、サマを描写したものと言える。

これら感覚に関わる文においても、“都”の有無は、絶対的なものではない。(12)(13)の下線部に“都”を挿入することができるし、(14)(15)の下線部から“都”を削除しても非文になるというわけではない。しかし、“都”を挿入した場合、(12)では上半身の疼痛が他の箇所の状況より強調されるし、また(13)では「気持ちよさ」が強調され、下線部に先立つ描写である体内の気の入れ替わりが、付随的な現象と解釈されることになる。(14)(15)から“都”を削除した場合には、原文にある痛みや気持ちよさが事実として述べられ、主観的な感覚が後退する。このように感覚を表す形容詞述語文の場合、状態を表すものではあっても、現実世界の当該場面に視点を置き、その場面の状況をそのまま述べようとするなら、“都”を付加する必要はない。感覚を表す形容詞述語文でも、感情を表す場合と同様、デキゴトをデキゴトとして述べ立てるのか、あるいは話し手の主観を含んだものとして述べ立てるのかが“都”の生起に関わってい

ると言えよう。

3. 感情・感覚以外の状態や属性を描写する形容詞述語文と“都”

次に、感情・感覚以外の状態や属性を描写する場合について見ていく。

前節では、感情や感覚が主体である経験者の身体に発生するデキゴトであり、“都”の有無について動詞述語文の場合に並行する使い分けがなされていることを見た。では、感覚の中でも、例えば「静か」「うるさい」のように聴覚を通して把握されるが、経験者の身体外の環境を描写する場合はどうであろうか。

(16) 母狼总是先叼走最小的狼仔，由公狼护送放进新窝。接着，“夫妻”俩再回去叼别的狼仔转移。送走的和留下等待的狼仔们很安静，它们不吵不闹，不争不挤，平时的嬉戏都暂时收敛了。（读者：CCL）
[母狼はいつも先に一番幼い子狼をくわえていく。オス狼がそれを守って新しい住処に移す。続いて、「夫婦」はまた戻って別の子狼をくわえ移していく。移される子狼も待っている子狼も静かにし、騒ぎもせず、喧嘩もせず、いつものふざけ合いも慎んでいる。]

(17) 刘成社说，以往中国游客最大的特点就是在公共场所大声喧哗，参观时交头接耳，但这次在参观悉尼歌剧院时，团员们都很安静，专注地听导游讲解，没有一个人高声议论。（新华社新闻报道：CCL）
[劉成社は、こう話した。「以前中国人観光客の最大の特徴は公共の場所で大声で騒ぐことであり、見学の際にはひそひそと話をしていたものです。しかし今回シドニー劇場を見学した際、ツアー客はみな静かにしていて、熱心にガイドの解説を聞き、大声であれこれ言う人は一人もいませんでした。]

(16) は、外敵を避けるため住処を変える狼の話である。親狼が子狼をく

わえて新しい住処に移す際、移された子狼も移されるのを待っている子狼も、おとなしく静かにしているという。こうした描写は、特定の時空間に生起する個別の事態から一般化されたものではあろうが、狼の習性ともいえる状況を述べたものでありイベント性は稀薄である。一方(17)では、中国人旅行客が今回シドニー劇場を訪れた際には、みな静かで、ガイドの解説に聞き入っていた、と叙述されており、むしろイベント性が認められる。これらの例では、特定の時空間に生起した個別の事態を描写する(17)に“都”が生起し、習性を述べる(16)には“都”が生起しておらず、感情や身体上の感覚を表す形容詞文の場合とは相違している。では、どのような要因が“都”の有無に関わっているのだろうか。

まず挙げられるのは、焦点の有無である。

(18) 按承包规定，徐关祥每年的报酬很高，但他已连续几年只拿半数。

(1994 年报刊精选：CCL)

[請負いの規定によれば、徐関祥の毎年の報酬は高いのだが、もう連続何年も半額しかもらえていなかった。]

(19) 由于每个透镜很小，因而使焦点距离缩短到 0.75 毫米，如果把这一技术用于制造照相机，可使照相机机身薄到 2 毫米。

(新华社新闻报道：CCL)

[どのレンズも小さいため、焦点距離を 0.75cm にまで縮めることができ、もしこの技術をカメラ製造に用いるならばカメラも 2cm の薄さにまでできる。]

(18)(19) 共に複文となっており、また“毎年”“每个”という語を含む文はどちらも従属節にあり、“都”が生起していない。(18)は、前節“徐关祥每年的报酬很高”に対し、逆説的に後節“他已连续几年只拿半数”が続いているが、強調したいのは後節である。(19)では前節“每个透镜很小”は、後節“使焦点距离缩短到 0.75 毫米”の原因・理由を表しており、やはり

後節こそが強調したいことである。

一方、次のように逆接でも因果でもなく、単文を並べた重文構造や焦点が認められる節内においては、同様な意味を表しながら“都”が生起している。

- (20) 比如在我的投资和对冲基金里面，一年交易大概四、五百支股票，每年的回报都很高，最少 40%—50% 以上，好的年成收益更多。

（新华社新闻报道：CCL）

[例えば、私の投資とヘッジファンドにおいて、一年間でおよそ四、五百回の取引をするが、毎年のリターンは大きく、少なくとも 40%～50% 以上で、良い時にはもっと収益が多い。]

- (21) 从南院的布局看，前面的偏房房间多达 10 间，每间都很小，仅有 2.5 平方米，而后院很大，并有两个大的石质牲口槽，（後略）。

（新华社新闻报道：CCL）

[南側の作りから見ると、前方には 10 部屋もあるが、どの部屋も小さく、2.5 平米しかない。しかし後ろの庭は大きく、また石でできた大きな家畜のえさ箱が二つある。]

(20) で“毎年の回报都很高”は、後続の文が具体的に述べるのに先立ち、より一般的な表現で、その最も主張したいことを述べている。(21) では、四合院の東西の部屋が十間もあるが、“每间都很小”と逆説的に続けており、より強調したいのは下線部である。

このように対照して見てみれば、(18)(19)の下線部に“都”が生起していないのは、偶然のことではなく、コンテキストにおいて情報の焦点をどこに置くべきかという意味論的な要因が関わっていると考えざるを得ない。そしてそう考えるならば、(17)において個別の事態でありながら、“都”が生起していることについても説明がつく。すなわち、前半と後半

が、かつては騒がしかったのに、今回は静かであったという逆説関係にあって、強調されるべきは後半部分であり、だからこそ“都”が生起しするのである、と。次の用例でも、“大家上汉语课时都很认真”は、“不过”を用いて、前節と逆接的に接続しており、そのため下線部において“都”が現れていると説明できる。

- (22) 在周文冰教过的学生中, 华人家庭的学生多会讲中文, 还有一些学生以英语为日常语言, 不过大家上汉语课时都很认真、很有兴趣, 汉语被列为必修课, 学校里还有专门供学生练习交流的‘中文俱乐部’。

(新华社新闻报道: CCL)

[周文冰が教えた学生の中で、中国人家庭の学生は多くが中国語を話せた。英語を日常言語にしている学生もいたが、みな中国語の授業の時はまじめで、興味を持っていた。中国語は必修授業になり、学校内には学生が会話練習をする中国語クラブも設けられた。]

こうした前後文とのつながりという観点で言えば、さらに論理的関係の属する領域が“都”の有無に関与していることが指摘できる。

- (23) 她想起早些日子收到朱瑞芳从上海寄来的信, 摇摇头, 说: “他们很忙, 现在又碰上‘五反’, 听说也很为难, 还没有过关, 怕顾不上这些事。”

(周而复·上海的早晨: CCL)

[彼女は以前朱瑞芳が上海から送ってきた手紙を思い出し、首を振って言った。「彼らは忙しいし、今また『五反』運動に出くわし、困っているらしいし、まだ山を越えていないから、こんなことに構ってられないと思う。』]

- (24) 随着年事逐高, 对远方儿女的牵挂越来越多, 总希望孩子们能回乡探望, 可又知道他们工作都很忙, 离得又太远, 常常难以启口。

(人民日报: CCL)

[年を取るにつれ、遠方の子供たちを思うこともますます多くなり、子供たちが里帰りしてくれないかと思うばかりであった。しかし彼らも仕事が忙しく、また遠くにいることもあり、いつも口にしにくかった。]

(23)において“他们很忙”は“碰上‘五反’”と共に、“顾不上这些事”の理由になっている。(24)でも「彼らは仕事が忙しい」は「離れて暮らしている」と共に“常常难以启口”の理由になっている。しかし両者の因果関係には相違がある。(23)では、一貫して彼らのことについて述べられており、理由と結果は、Sweetser 1990 のいう内容領域に属している。一方、(24)では、忙しいのは子供で、口にできないのは親であり、帰って来てほしいと口にするという行為が取れないことの理由として子供たちの状況が示されている。つまり認識領域での因果関係となっている。2節で見た、領域の相違と“都”の有無が、ここでも観察される。

(25) 作为中国的重化工业大省，辽宁的资源消耗和环境污染一直很严重。传统的“高开采、高能耗、高排放”的粗放型经济增长模式，导致资源的过量开采和环境的不断破坏。（新华社新闻报道：CCL）
[中国の重化学工業を担う省として、遼寧省の資源消費と環境汚染はずっと深刻であった。伝統的な「大量に採掘し、大量に消費し、大量に排出する」という粗略型経済成長モデルが、過度の採掘や絶え間ない環境破壊を招いた。]

(26) 我国是个人口大国，就业问题一直都很严重，“九五”时期会更加突出，必须引起高度重视，切实解决好。（人民日报：CCL）
[我が国は人口大国であり、就業問題はずっと深刻であった。第9次5か年計画の頃にはより顕著になり、注目を集め、解決されることになるだろう。]

(25)では、資源の消費と環境汚染が“一直很严重”であるとし、その原因として、これまでの大量消費奨励式の経済成長モデルを挙げている。こ

れは、一般に認められている、現実世界での事實的因果関係を述べたものである。それに対し、(26)では、就業問題が“一直都很严重”であったと主張し、この状態がさらに悪化することで、却って解決へと向かうだろうと今後の予測を示している。この前節と後節は、話し手によって関連付けられたものであり、空が暗くなってきたので雨が降るといような、一般にそうだと認められているようなものではない。発生しうる可能性が高いとしても、あくまで認識領域における論理関係となっており、そのため“都”が付加されていると解釈できる。

内容領域での論理関係は、現実の事象に基づくものであり、認識領域での論理関係は、話し手の認識・判断に基づくものである。また、情報の焦点の有無から見れば、焦点がない場合は、事実を事実として伝える、いわゆる「報道」であり、焦点のある場合は、話し手の認識が反映した「解説」になる。そして、前者では“都”が現れず、後者では“都”が現れる。「報道」的であるか、「解説」的であるかは、明確に線引きできるものではなく、話し手の主観を言語化するか否かであり、言語化の一つの手段として“都”があると考えられる。言い換えれば“都”の生起は、統語的な規則によるものではなく、生起すれば主観的な意味合いが強まり、生起しなければニュートラルに傾く。生起の条件は、コンテキストにおいてどちらがよりふさわしいかという相対的なものであり、叙述態度という話し手の認識に左右されるようなものである。こうした意味において、形容詞述語文であっても、「報道」的な事象叙述文の場合には“都”が現れず、「解説」的な主題叙述文である場合には、“都”が現れると解釈できよう。

4. “是”字文と“都”

“是”字文は、XはYである、というような同等関係、あるいは包含関

係を示すものであり、特定の時空間に実現・存在する個別的現象を叙述するにはなじまない形式である。しかし、前節で述べたような叙述態度という観点から見た場合には、やはり形容詞述語文に並行する状況を指摘することができる。

- (27) 《補白集》見报了。他没有想用诗召唤什么人，王曼恬两年前去去世了，
儿女与他之间，久未通信，他们是她的儿女，而不是自己的儿女了。

(读者：CCL)

〔『補白集』が新聞に載った。彼は詩で誰かを呼びだすつもりはなかった。王曼恬は2年前に亡くなり、子供と彼の間には、久しくやり取りがなかった。子供たちは彼女の子供であり、彼の子供ではなくなっていた。〕

- (28) 生父真诚地对养父说：“老哥哥，这个孩子我不认，你看，我把儿女都带来了，他们都是你的儿女，你看看咱们两家合起来这么多人。”

(读者：CCL)

〔実の父親は、育ての親に「兄さん、この子は私の子ではありませんよ、ほら、私の子供たちを連れてきました、みんな兄さんの子供ですよ、二つの家が一緒になったら、こんなにたくさんの家族になりますよ。」と言った。〕

(27)において、“他们是她的儿女”と“不是自己的儿女”は、AであってBではないという、同一概念レベルで対比的関係にある²⁾。一方(28)において、“他们都是你的儿女”と“咱们两家合起来这么多人”の論理的関係はやや複雑である。“他们”は、実際のところ“老哥哥”の子供ではなく、ここではあなたの子供も同然であるという意味で示されている。そして、「そう考えるならば、両家は一家族みたいなもので、合わせたら大家族です」

2) 実際のところ、子供たちは自分の戸籍上の子供であるとしても、現実には、手紙や電話のやり取りもなく親子関係が断絶しているため“不是自己的儿女”と述べている。

のように、含意する意味を読み込むことによって、結び付けられている。

- (29) 这部影片讲述了两位美国青年在北京的遭遇，以独特视角显现了外国人与中国人的情感波澜。影片的编剧和导演是美国人，由中美两国著名演员主演。 (人民日报：CCL)

[この映画は、二人のアメリカ人青年が北京で遭遇したことを描いており、独特な視点から外国人と中国人の感情の動きを映し出している。脚本家と監督はアメリカ人で、中米両国の著名な俳優が出演している。]

- (30) 在进入美国网球公开赛男、女前八名的道路上，两员大将今天又相继倒下，巧的是他们都是美国人，都是前世界头号选手。

(人民日报：CCL)

[アメリカテニスオープンは男女ベスト8の戦いに入った。二人の有力選手が今日相次いで屈したが、偶然にもどちらもアメリカ人であり、前のランキング1位の選手であった。]

(29)でも(30)でも、“编剧和导演”あるいは“他们”がアメリカ人であるというのは事実である。しかし、(29)では、ある映画についての事実を事実として述べているのに対し、(30)では負けてしまった有力選手が、“巧的”、偶然にもそうであったという、話し手の視点が言語化されている。まさに、前者が「報道」的である一方、後者はすでに言及されている“两员大将”について、なおその属性を「解説」している。前者に“都”がなく、後者に付加しているのは、形容詞述語文の場合に一致している。

“是”字文においては、こうした前後文との論理関係以外にも、“都”の有無が“是”字文自体のタイプに関わっている場合がある。

- (31) 一次，唐吉诃德和桑丘遇见一队带着手铐脚镣的人，被卫兵押往大帆船上当奴隶。谨慎的桑丘说，他们是罪犯，应该受罚。

（读者：CCL）

[ドン・キホーテとサンチョが手かせ足かせをした一群に遭遇したことがあった。彼らは衛兵によって大帆船へ護送され奴隷にさせられていた。慎み深いサンチョが、彼らは犯罪者であり、罰を受けなければならないのだと言った。]

(32) 1818年、一艘欧洲探險船历经艰辛在格陵兰的西北部图勒靠岸，当白人探險家们正在欢呼他们创下距北极点更近的探險纪录时，一群身着北极熊皮和北极狐皮的黄色面孔从冰山雪谷中跑了出来。白人们吓傻了，这些手持长矛的人莫非是鬼？或是神？是人怎能在这样极端严酷的条件下生存？（中略）他们是人，爱斯基摩人。

（读者：CCL）

[1818年、ヨーロッパの探検船が苦勞の末にグリーンランド西北部チュールに到着した。白人探検家たちが北極点までより近い地点への探検記録を作ったことに歓呼していた時、北極熊や北極狐の皮をまとった茶色い顔をした者たちが氷雪の中から走り出してきた。白人たちは驚いた。手に鉾を持った人は幽霊か。神か。人ならばこんな厳しい条件下で生存できるだろうか。（中略）彼らは人間だった、エスキモー人だった。]

(31)では、まず眼前の状況を描写し、その奴隷として働かされている人たちというのが、“(他们) 是罪犯”とその身分を提示している。“(他们) 是罪犯”は、奴隷として働かされていることの原因にもなっているが、その論理関係は、犯罪者ならば制裁(=労働)を受けなければならないという、内容領域に属するものである。(32)は、人か幽霊かも判然としなものの様子を描写し、その正体を“他们是人，爱斯基摩人”としている。これは話し手が論評するような類別ではなく、百科事典的な事実とも言える類別である。(31)(32)では、主語が“他们”である、つまり [+全量] ではないということが“都”の生起を抑制しているわけではない。事実、

“他们”は“都”と共に起ることが少なくない。

(33) 他还是非常客气地说：“您能光顾本店，我感到莫大的荣幸。但是，因此而谢绝其他客人，是我所不能做的。他们都是老熟客，也就是支撑着这个店的人，而现在因为您的缘故把他们拒之于门外，我是无论如何不能那样做的。”（读者：CCL）

[彼はやはり非常に礼儀正しく言った。「あなた様にお越しいただき、大変光栄に存じます。しかし、だからと言いまして他のお客様をお断りするわけにはいきません。あの方たちは、なじみのお客様で、この店を支えてくださっている方たちです。今、あなたにお越しいただいたからと言って、あの人たちを追い出すことはどうあろうともできません。]

(34) 我们这一工作队共有8人，4人下舱，4人在上面将糖包送进邻接的仓库。我们抛钱币，决定谁先下去搬取头两批货物。我输了，于是和凯斯、布鲁与寇尔利一同登船，他们都是澳大利亚人。上船的战俘只有我是英国人。（读者：CCL）

[私たちの作業班は、合わせて8人、4人が下、4人が上で砂糖袋を隣接した倉庫に運ぶ仕事だった。コインを投げ、先に降りて行って最初の2回分の荷物を受け取る人を決めた。私は負けたので、ケースとブルー、コーリと一緒に船に乗った。彼らはオーストラリア人だった。船に乗った捕虜は自分だけがイギリス人だった。]

(33)では、ある著名な政治家が訪れようとした店に対し、自身の随行者が多いため、貸し切りで予約をしようとしたところ、店主がその要求を拒否したという場面である。予約の段階であるから、実際にその政治家が来店する際に誰が来ているかは分からない。しかしそれでも、おそらく他の常連客が来ているから要求に従うことはできないというのである。要求を拒否する理由は、店主が予測する事態であることから、この

因果関係は認識的なものである。また来店するであろうお客を、更に“老熟客”とその属性を追加的に提示している。(34)では、一緒に船に乗った人たちが“(他们) 都是澳大利亚人”であったというのだが、名前が示されているように、これまでも行動を共にしている人たちである。つまり、どんな人間であるかはわかっていて、この場面において、敢えてその属性の一つを取り立てている。

“都”が付加されていない(31)(32)では、“X是Y”のXが「どれ」であるかは了解されているが、それが何者なのか分からないという状況で、Yであるという情報を提供している。熊本2005や西山2003の用語を借りれば、他の対象から識別する条件を指定する「同定文」³⁾と言えるものである。一方“都”が付加されている(33)(34)では、Xが何者であるかは了解されている状況で、改めてどのような属性を有するかを提示している。西山2003では、こうしたタイプのコピュラ文を指示的名詞句の性質・属性を表す「措定文」と分類している。

こうした相違は、次の「○○は彼の学生だ」という文においても、“都”の有無として反映されている。

(35) 小正躲在路边的草垛后面，看见他们朝爷爷走过去了。到了爷爷面前后，他们大家便一齐趴到地上，和爷爷一块在那里吃草。远远望去，他们就像是一群牛。有几个离得比较近的被小正认出来了，他们是爷爷的学生。 (残雪自选集：CCL)

[正ちゃんは、藁におの陰に隠れ、彼らがおじいちゃんの方へ向かっていく

3) 正確には、「倒置同定文」にあたる。例えば、山田さんが誰だかは分かっている、いったい何者なのか問題となっている状況で、なんでも反対する、そういう人なのだ、という意味合いで「何でも反対するひとが山田さんだ」と言えるが、熊本2005や西山2003ではこれを同定文と呼んでいる。そして、これを倒置した「山田さんは、なんでも反対するひとだ」を倒置同定文と呼んでいる。

のを見ていた。おじいちゃんのところに来ると、みんな一斉に這いつくばり、おじいちゃんと一緒に草を食べ始めた。遠くから見ていると、彼らは牛の群れのような感じだった。比較的近いところにいる人を見て、正ちゃんは気がついた、あの人たちはおじいちゃんの学生だ。]

- (36) 我国许多著名的科学家，如数学家许宝祿、段学复、庄圻泰，物理学家严济慈、赵忠尧，化学家柳大纲，地理物理学家赵九章，核能专家钱三强等都是他的学生。 (中国儿童百科全书：CCL)

[我が国の多くの著名な科学者、例えば数学の許宝祿、段学復、庄圻泰、物理学の嚴濟慈、趙忠堯、化学の柳大綱、地理物理学の趙九章、核エネルギーの専門家錢三強などは、みな彼の学生だ。]

以上、“是”字文における“都”の有無について見てきた。形容詞述語文にも増して、イベント性に欠ける“是”字文ではあるが、“都”が生起しない場合には、事実を事実として「報道」的に述べる、内容領域での叙述であることが窺えた。そして、“都”が生起する場合には、話し手の主観的な判断や認識に基づき情報を提示する、認識領域あるいは発話行為領域に属する叙述であると言える。

5. “都”の生起と概念領域

総括的意味を有する“都”は、[+複数]や[+全量]という意味特徴があれば、常に付加するというものではない。「すべて、ずっと」という内容語としての意味に加え、対象となる事物や時間のすべてに当てはまることを話し手が取り立てる機能語としての働きもある。それゆえ、動詞述語文においては、現象を現象のままに言語化する「一般的描写性叙述文」では“都”が現れず、現れるのは、話し手の認識や判断というフィルターを通した「非一般的描写性叙述文」の場合になる。形容詞述語文

においても、感情や感覚など、特定の空間に起こる現象の場合には動詞述語文と同様な原則が当てはまる。しかし、感情や感覚以外の場合には、特定の時空間に起きた現象であっても“都”が生起し得、その際には情報の焦点であるか否かが関与することを見た。焦点は、話し手の叙述態度が現れるものであるため、やはり「非一般的描写性叙述文」の範疇に入る。焦点というのは、言うまでもなく、コンテキストにおいて決定されるものであり、したがって意味論的、語用論的要因こそが“都”の有無に大きく関与するのである。“是”字文における同定文と措定文がそうであったように、事実を事実として叙述するか、話し手の認識を反映させた叙述をするか、という態度の如何が“都”の生起に大きく関与する要因だと言えよう。つまり、動的事象文であれ、非動的事象文であれ、Sweetser 1990のいう内容領域あるいは対象領域のレベルであるか、話し手の認識を反映する認識領域や発話行為領域あるいは主体領域のレベル⁴⁾であるかが、“都”の生起を左右すると考えられる。

このことを念頭に、(1)～(4)の例文をもう一度見てみよう。

- (1) 他说，他每次登完山后，很高兴，很有力量，以后还想登。
- (2) 总理每次见到他都很高兴，两人说话都很随便，而且一直都在开怀大笑，没有一般外交场合的那些礼仪。
- (3) 李昕的性格外向、开朗，她觉得和男队员相处起来反而更为融洽。在训练中队员服从教练，训练后大家是朋友，队里气氛轻松、自由。
- (4) 胡说，你要么不应，既然答应了人家就要做到。这是个信誉问题。大家都是朋友，我怎么跟人家交代？你办事不力嘛！

(1)は、“都”が無いことから、話し手自身が登山後にいつも感じること

4) 益岡 1997:79-82 は、文の概念レベルを「対象領域(命題)のレベル」と「主体領域(モダリティ)のレベル」に分けている。

を事実として述べている。(2)では、話し手の目に映った総理の様子であり、“没有一般外交场合的那些礼仪”とあるように、話し手のコメントを付加するようなコンテクストになじむ形式として“都”が生起している。(3)は、訓練が終われば「みんなが友達である」という事実を述べるものである。また隊の雰囲気が良いことの原因として見るなら、その関係は内容領域において成立する。一方(4)は、みんなに伝えられないことの原因として「友達である」ことが挙げられており、その論理的関係は認識領域において成立し、したがって“都”が生起している——そう解釈できよう。

そもそも、言及対象について、その「すべて、ずっと」であることを言おうとするならば、その視点は対象から一定の距離を置かざるを得ない。例えば、ある場面において目の前にいる人々が、ある動作行為を行う時、それがその場面にいる人すべてがそうしたと言うには、やはり当該場面から距離を置いて俯瞰しなくてはならないであろう(図2)。そうした使用の条件が、話し手の視点に一致し、そして叙述の態度でもあると考えられる。

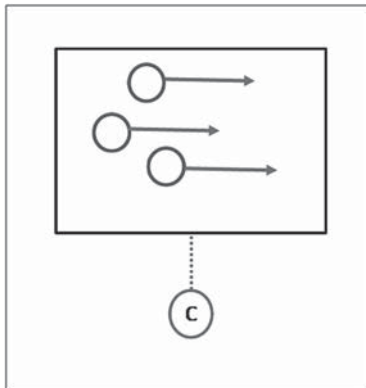


図1 “都”が生起しない場合

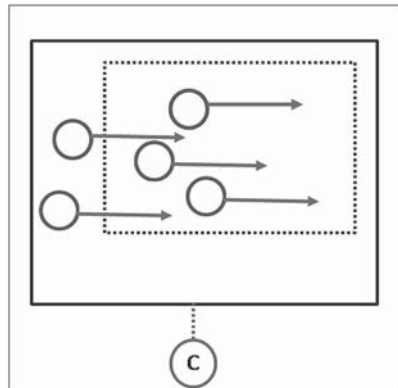


図2 “都”が生起する場合

(C: 概念化者)

意味論的、語用論的要因というのは、実際には様々な事情・状況が絡み合うため、統語論的要因に比較し例外も多く、また解釈によっては異なる様相を見せることもあるだろう。しかし、典型的な使用条件を明らかにすることは、錯綜する要因を解きほぐす一つの大きな手掛かりとなるはずである。

参考文献

- 熊本千明 1995 同定文の諸特徴, 『佐賀大学教養部紀要』27, pp.147-164
- 西山佑司 2003 『日本語名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句——』ひつじ書房
- 益岡隆志 1987 『命題の文法——日本語文法序説——』くろしお出版
- 益岡隆志 1997 『複文』くろしお出版
- 胡蓉洁 2012 试析留学生范围副词“都”的偏误, 《外国语文》S1期, pp.72-73
- 解燕勤 2005 留学生学习汉语副词“都”的偏误分析及思考, 《昆明师范高等专科学校学报》第27卷第1期, pp.68-75
- 李丽君 2015 第二语言汉语副词“都”的习得考察, 『言語文化論究』35, pp.71-77
- 蘆濤 2005 汉语副词使用错误分析, 『広島大学総合科学部紀要.V, 言語文化研究』31, pp.159-185
- 袁毓林 2005a “都”的语义功能和关联方向新解, 《中国语文》第2期, pp.99-109
- 2005b “都”的加合性语义功能及其分配性效应, 《当代语言学》第4期, pp.289-304
- Sweester, Eve. E. 1990 *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cambridge University Press.

用例出典

CCL : http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/

BCC : <http://bcc.blcu.edu.cn>

* 本稿は、第47回中日理論言語学研究会(2016/10/23)での発表の一部を加筆修正したものである。島津先生に最後に聞いていただいたものであり、ゆっ

くりお話ししたのもその時が最後となってしまった。島津先生と言葉を交わすようになったのは、実はわずか5年ほど前なのだが、これからお互い刺激し合い、率直に意見を言い合える関係になれそうだと思っていた。それは島津先生のお人柄によるところが大きいことは言うまでもない。大変残念である。御冥福を心からお祈りする。